# 引き出し

佐藤　寛子

こども達との日々の生活の中で、自分の幼い頃の情景を思い出すことがよくある。眼の前にいるこども達と関わり、つながりを深めていくには、まず自分の中のこどもと向き合うことになるのかもしれない。

和室の奥に背の高い箪笥が置いてある。上の段の引き戸を開けて中にある小さな引き出しから、母が小さな桐の箱を出す。大事に両手で持ってきて、そっとふたを開け、幼い私に見せてくれたものは、ひからびて小さく縮んだへその緒だった。初めて見たときのあの何とも言えない不思議な感

覚と、ほっとして心が温かくなった感触。それが忘れられずに少し背が伸びてからは、母に内緒で自分でこっそりあの小さな引き出しを開けてみたこともあった。母はどういう思いで私にへその緒を見せたのかは分からないが、弟がよく動くようになって母が大変であったり、幼稚園に初めて行くことになったりと、あの時の私は家でも外でもなんとなく所在なかった。へその緒は母と私をつなぐ証であったし、それが箪笥の小さな引き出しに大切にしまわれているということが、あの時の私をしっかりと支え、今の私がここにいるのだと思う。

何年もたってこの情景を私は忘れてしまった。忘れたというより、私の心の引き出しに大切にしまったままにしておいたという方が正しいのかもしれない。だいぶ時間の過ぎた今になって、心の中のあの引き出しを開けることを思い出させてくれたのは、紛れもなく日々泣いたり笑ったりとおおいそがしのこども達であった。

## 靴

昨年の四月のことである。年中組のこども達にとっては自分の身の周りの環境が大きく変化し、戸惑いの多い時であった。そして、その戸惑いは、進級したこども達の方が新しく入園して来たこども達より大きかったような気がする。保育室が変わり、クラスの人数が増えた。その上、担任もかわった。

こども達の降園後、しまい忘れた作品をひとりひとりの引き出しに入れようと、M子の引き出しに手を掛けたが、うまく開かない。どうやら物が入りすぎていて、中でひっかかってしまったらしい。新学期が始まって間もない頃であったし、M

子が保育中に何か作っていたような様子はなかったので、何がこんなに入っているのかと不思議に思った。上の段の引き出しをはずし、ひっかかっていたものを取り出して驚いた。それは厚紙で作ったかわいらしい靴だった。他にもいろいろ作ったものが、ビニール袋にごっそり入っていた。どれにも丁寧にひらがなで名前が書かれてあった。私には、すぐにそれらがM子が年少組の時に担任のT先生との間で作ったものであることがわかった。私は、何だか見てはいけなかったような気がして、少し整理をして靴を入れ、そっと引き出しを閉めた。

翌日、M子は変わらずに登園し、いつものように仲良しの三人と庭や廊下でままごとをしていた。あの引き出しから作ったものを取り出して、それを使って遊ぶようなことはその後も一度もなかった。

一学期も終わりに近づいた頃、大きなカラービニール袋でドレスを作るのが流行った。M子もみんなと一緒に作り、一日身につけて遊んでいたが、引き出しにしまう段になって、私を呼んだ。

「せんせい、いっぱいで入らなくなっちゃった」

私はM子と一緒に、少しずつ中の物を寄せてスペースをつくり、小さくたたんだドレスをそこに入れようとしたのだが、なかなかうまく入らない。すると、M子はあの靴を取り出して言った。

「これ、おうちに持って帰ろうかな」

その後いつの間にか、あのビニールに入った思

い出の品々は、次々と新しく作った物へと姿を変えていき、二学期になってからは、幼稚園に持ってくることはなかった。幼稚園に置いておく必要がなくなったのだろうと思う。

こども達は環境の変化を前向きに受けとめ、何とかそこに自分の場所をつくろうとする。新しい保育室の自分の引き出しに、年少組の時に作ったものをたくさん詰め込むことで、過ごしてきた時間と今をつなごうとしたのかもしれない。

## 年輪

年長組になると、小さな組のお世話をしたり、幼稚園全体の生活をみんなで創っていくような活動が自然と多くなる。環境の変化に敏感で、年中組のときは変化の一つ一つに戸惑い、何かというと私にぶつかってきたY夫が、さらにランクアップした幼稚園の生活を受け入れられるか心配したが、張り切って登園してくる様子に彼の成長を思い、嬉しくなった。

ある日、新しい自由画帳をこども達の引き出しに入れていたところ、Y夫の引き出しからごろんと丸太が出てきた。年長組の砂場で使えるようにと、隣の組のI先生と水道管や竹筒や板などを棚に用意したのだが、その中に小振りの丸太があった。Y夫はそれを見つけてきて、こっそり自分の引き出しにしまったのだ。

みんなで使うものなので、あった場所に戻すように言う方が良いとは思ったのだが、なぜかそう言ってしまうことが憚られた。一つくらいここにあっても差し支えないだろう。それよりもY夫がここにこっそりしまっていることの方が意味があるような気がした。

何日かして、Y夫が

「せんせい、木のねんりんてね。いちねんいちねん数がふえるっと知ってた?大きくなるんだよ」と嬉しそうに話してきた。

Y夫は、大きくなることを楽しみに、自分の引き出しに丸太をそっと入れておいたのだ。毎日毎日、大きくなっているか引き出しを開けて確かめていたのかもしれない。丸太はもう大きくなることはないのだが、一年一年、一刻一刻着実に大きくなっている自分をどこかで意識しているのだろう。

その後、本で読んだのか、丸太は成長しないということが分かったようで、引き出しからこっそりもとの場所に戻すY夫の姿を見かけた。

## 四葉のクローバー

年長組になってから、なんとなくS子が元気がないのが気になっていた。年中組の時は他の人に関係なく自分のしたいことを黙々とやり続け満足して帰るというのが彼女の幼稚園での生活であったのだが、最近「友達がいない」と言ってきたり、見かけると暗い表情でぽつんと立っていたりする。自分の望む友達と自分の望む遊びがしたいようなのだが、なかなか上手くいかないらしい。母親からも、「最近下の子の育児に追われ、S子にあまりかまってやれていない」という話を聞いていた。

S子をさそって二人で園庭を散歩することにした。園庭の山の上はクローバーが大きく育って、シロツメクサがたくさん咲いていた。S子はシロツメクサを摘んで束にした。私も摘んだのだが、一緒に抜いてしまったクローバーを見て驚いた。四葉だったのだ。「四葉のクローバーを見つけるとしあわせになれる」という話を誰からともなく

聞いて、幼い頃からクローバー畑を見つけるたびに必死で探してきたのに、自分のしあわせのために必死な時は見つからず、こういうときに出会えることを不思議に思いながら、私はS子の前で飛び上がって喜んだ。

S子は呆気にとられて見ていたが、私が四葉のクローバーの話をし、「Sちゃんと一緒だったから見つかったのよ」と言い、「だから私が持っているよりSちゃんが持っていたほうがいい」と言うと、嬉しそうに笑った。S子のエプロンのポケットになくさないように大事にそれをしまった。

翌日、S子の母親に昨日の話をした。エプロンのポケットにしまったことを話すと、母親は驚いて、「洗濯しちゃったかもしれません」と申し訳なさそうに言った。「昨日私がお話をしなかったのだから仕方がないですよ」と言いながらも、生まれて初めて見つけた四葉のクローバーが洗濯機の中で粉々になることを想像すると少し悲しかった。ところが、母親と私の話を聞いていたのか、S子が

「クローバーだったら、ちゃんとあるよ」

と言って、自分の引き出しをそーっと開けた。私と母親が見守る中、その小さな手に大事に握られてきたものは、紛れもなく昨日二人で見つけたあの四葉のクローバーだった。私と母親とは顔を見合わせた。

「Sちゃん、すごいわね。大事に引き出しにしまっておいたのね」

S子の手のひらの四葉のクローバーは、S子と母親、S子と私、そして私と母親を全部ひとつにつないだ。

こども達と過ごしていると、彼らが何をどこまでわかっているのか、何だかわからなくなることがある。おとなが伝えないと形にできないことをたくさん抱えながらも、もっと深いところでおとなが思うよりずっと丁寧にものごとを見たり感じたりしているように思えるからだ。そして彼らはそれを驚くほど具体的に表現してくるのだ。

保育室のひとつひとつの引き出しは、こども達ひとりひとりの幼稚園での場所なのであろう。ときどき引き出しの中から、ビニール袋に入って乾燥した昆虫が出てきたり、ドライフラワーになってしまった花束が出てきたり、私が探していたマジックのふたが出てきたりして、入れた本人も驚いていることがあるが、その時その時の思いの詰まったものを大事に引き出しにしまうことで、〈昨日と今日、今日と明日という時間〉や〈友達、親、先生との関係〉〈過去・現在・未来の自分〉をしっかりとつなごうとしている。

こども達との生活の中で、私が時折自分の心の引き出しを開けてみたくなるのは、私自身もまた、今の自分がここにあることを確かめてみたくなるからである。そして、おとなになる以前の幼い頃の感覚の方が、今を真剣に生きる彼らとまっすぐ出会えるからである。出会うことを出発にして一緒に過ごしながら、いつかこども達が、ここで過ごしたまるごとの時間や思いを、ごっそり心の引き出しにしまって巣立つ日がくることを私は願っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）